赤十字NEWS

November 2012 Vol.870 11
http://www.jrc.or.jp

日本赤十字社

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 企画広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

AKB48と一緒に学ぶ AED講習会

いざというとき、そのいのちを救いたい！

「いろいろな場所にAEDはあるけど、使い方を知っているのと知らないのとでは本当に違うので、多くの方に使い方や救急法を知ってほしいです」（AKB48・高橋みなみさん）――AED（自動体外式除細動器）の使い方や心肺蘇生を知ってもらうため、全国の支部で講習会を開催しています。10月24日には東京都支部で「AKB48と一緒に学ぼう AED講習会」を開催。「実際にやってみたら、はじめての私でも簡単にできたので、私と同い年くらいの方たちにも知ってほしいです」（AKB48・島崎遥香さん）。メンバーはこう呼びかけています。（3面に関連記事）

AKB48メンバーの高橋みなみさん（写真左）と島崎遥香さん

CONTENTS

TOPICS 2
赤十字広報特使 藤原紀香さん
田原坂で「日赤発祥の地」宣言
募金が支える世界の支援活動を紹介
「海外たすけあい」特別番組
シリア救援金募集中

TOPICS 3
「赤十字を知ってほしい。もっと。」
AKB48、AED講習会参加
名誉総裁皇后陛下
施設入所者に
日本手拭いのお見舞い
常任理事会開催報告

SPECIAL 4 5
血液事業の新体制がスタートしています
血液製剤のさらなる
安全、安定供給を目指して

AREA NEWS 6 7
山口・大阪・千葉・長野・
徳島・秋田・和歌山
スポーツとコラボ
鹿児島県奄美地方台風災害への
義援金募集
九州大雨災害への義援金報告
プレゼント

WORLD 8
ハイチ：特別リポート
生活改善へ芽生えた
コミュニティーの自覚
世界災害報告2012
世界で7300万人が強制移住
連載第3回
ドクター中出のカロンゴ日記

クローズアップ ひと

タレント
中村優さん

マラソンがきっかけで赤十字救急法救急員に

今年7月に赤十字救急法救急員養成講習を受講した中村さん。「こんなに身につけたい、自分のものにしたい、と思った講習は初めて。救急法は特別な人だけのものじゃない。もしものときに誰かを助けられるわけですから、みんなが身につけておいていいものですよね」

救急法を学ぼうと思ったきっかけはマラソン。仕事で参加した4年前のホノルルマラソン、完走したことで走る楽しさに目覚め、さまざまな大会への出場を重ねてきました。ところが、救急車で運ばれるランナーに遭遇することが……。「誰かが倒れたとき、自分が何もできずにいるなんて悔しい。助ける技術と知識を本気で勉強したいと思ったんです」と力を込めます。

走っているときはいつも笑顔。走ることを通じて仲間や人の輪が広がったそうです。「マラソンは私にとってコミュニケーション。これからも走る楽しさを伝えていきたいし、救急法についてもランニング仲間をはじめ、周囲に広めようと思います。学んだことを活かして、もっと人の力になりたいです」

PROFILE

1987年、奈良県生まれ。高校生の時に「ミスマガジン2005」で審査員特別賞を受賞。06年から本格的に芸能活動を始め、テレビやラジオ、舞台などで活躍。現在、ランニング番組「ラン×スマ～街の風になれ～」（NHK BS1）にレギュラー出演中。マラソンの自己ベストは昨年11月の湘南国際マラソンで出した4時間21分51秒。

赤十字広報特使 藤原紀香さん

西南戦争の激戦地・田原坂を初訪問

「日赤発祥の地」を宣言

「赤十字の原点の地に立ち、受け継がれている歴史と精神の重みをあらためて感じることができました」――赤十字広報特使の藤原紀香さんが9月22日、「日赤発祥の地」の田原坂公園（熊本市）などを初めて訪問。赤十字の活動を普及させていく特使としての決意を新たにしました。

明治10（1877）年の西南戦争で最大の激戦地となった田原坂（たばるざか）。ここでの凄惨（せいさん）な戦いがきっかけとなり、日赤の前身である戦時救護団体「博愛社」が設立されました。

藤原さんは公園内にある田原坂資料館で、西南戦争に関連する歴史資料などを田原小学校の児童約20人と一緒に見学。その後、「西南の役戦没者慰霊碑」への献花式に臨み、地元の教育関係者や児童らを前に「日赤発祥の地」宣言文を読み上げました。

田原坂資料館では地元小学生たちが描いた「田原坂の戦い」の絵の前で記念撮影

文明の進歩示した赤十字の精神

宣言の中で藤原さんは『苦しむ人を敵味方の区別なく救護する』という赤十字の精神をわが国に植え付けた、この地の意義と重要性を再確認いたしました」と自らの思いを述べるとともに、田原坂とその周辺地域を「日赤発祥の地」として力強く宣言しました。

献花式では、日赤の大塚義治副社長があいさつ。博愛社の創設者・佐野常民が「文明の進歩は赤十字のような事業が盛んになること」と訴えていたことなどを紹介し、日赤の歩みがここから始まった歴史的重要性を強調しました。田原小学校の児童による剣舞も披露され、藤原さんは「皆さんが、自ら『気づき、考え、実行する』目標を持ち、人を思いやる心を大切にして、争うことのない、輝く未来の担い手になってくれることを、心から祈っています」とメッセージを送りました。

日本の「ソルフェリーノ」――田原坂

明治政府の官軍が、西郷隆盛率いる薩摩軍（鹿児島士族）と正面からぶつかった西南戦争。熊本を主戦場とした約7カ月に及ぶ戦争での死者は両軍合わせて1万4000人余り。最大の激戦地となった田原坂では、銃砲撃や抜刀隊による戦いで1日平均200人もの死者とその数倍の負傷者が出る地獄絵図が17日間にわたり繰り広げられました。

こうした凄惨な戦場の様子を伝え聞いた元老院議官の佐野常民は、欧州視察の際にその存在を知った「赤十字」を日本でも実践する決意を固めます。「敵味方の区別なく戦傷病者を救護する」ための組織の結成です。

そして志を同じくする元老院議官の大給恒（おぎゅうゆずる）とともに「博愛社設立請願書」を政府に提出します。いったんは却下されましたが、戦地の官軍を統括していた総督の有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）に直訴すると許可が下り、日赤の前身「博愛社」が設立されました。明治10年5月のことです。

1万4000人の死者を出した西南戦争

踏み出された歴史的一歩

アンリー・デュナンによる赤十字思想の着想は、イタリア統一戦争での「ソルフェリーノの戦い」がきっかけでした。それと同様、田原坂での戦闘が日赤創設へとつながりました。田原坂が「日本のソルフェリーノ」と呼ばれるゆえんです。

こうして設立された博愛社による救護活動は、同年10月末まで続けられました。延べ199人の救護員が派遣され、記録に残っているだけで1429人の負傷兵の治療・看護を行ったと伝えられています。

田原坂資料館の主任学芸員、中原幹彦さんは「西南戦争全体の規模からすれば、博愛社の救護活動は限定的。しかし、救護した人数の多寡ではなく、この時に日本における赤十字活動が第一歩を踏み出した、その事実こそが重要です」と歴史的意義について語っています。

こども医療センター（熊本）が全面オープン

藤原紀香さんが入院中の子どもたちを激励

熊本赤十字病院のこども医療センターの全面オープンを記念して9月23日に開催された式典に藤原紀香さんが出席。小児病院に入院している子どもたちを見舞いました。

こども医療センターは、小児救急患者に対応するため、南九州初の小児集中治療室を整備。南九州の小児救急医療の拠点としての役割が期待されています。

テープカットなどの式典後、小児病棟の子どもたちを見舞った藤原さんは、こども医療センターのキャラクターが描かれたピンバッジなどをプレゼントしながら「早く良くなってね」と激励。同院内で開催された幼児安全法講習にも体験参加し、受講者と交流を深めました。

シリア人道危機 救援金募集中

～シリア及び周辺国での人道支援のために～

シリアではこれまでに3万人以上が武力衝突の犠牲になっています。日本赤十字社は、同国赤新月社や国際赤十字により展開されている医療支援や物資の配付、周辺国に逃れた避難民の救援活動などを支えています。国民の皆さまからの救援金をお願いいたします。

受付期間／平成24年12月28日（金）まで
金融機関／郵便局・ゆうちょ銀行
口座番号／00110-2-5606
口座名義／日本赤十字社

※振替用紙の通信欄に「シリア救援」とご明記ください。
※郵便窓口でのお取り扱いの場合、振替手数料は免除されます。
※受領証をご希望の場合は、振替用紙の通信欄に「受領証希望」と明記のうえ、お名前、ご住所、お電話番号を記載してください。
※銀行口座でも救援金を受け付けております。詳しくは、日本赤十字社のホームページをご覧ください。

赤十字×NHK

テレビ番組のご案内

募金が支える世界の支援活動を紹介

「海外たすけあい」特別番組

「海外たすけあい・歳末たすけあい」（12月1～25日）の実施に向けて、特別番組「あなたのやさしさを2012」が11月24日（土）にNHK総合で放映されます。「海外たすけあい」への寄付に支えられているウガンダ母子保健事業やネパール防災事業のために派遣されている日赤職員のリポートを紹介。「海外たすけあい」が始動した当初の取り組みから、現在に至るまでの「たすけあい」のつながりもお伝えします。

「海外たすけあい」は今年で30年目

また、11月10日に開催される「赤十字シンポジウム2012」の模様もEテレにて放映。「たすけあいを、忘れない。～今わたしたちにできること～」をテーマに、会場の子どもたちとパネリストが国際援助のあり方を考えていきます。

【放映予定日】　11月24日（土）
NHK総合　「あなたのやさしを2012」（10：05～10：54）
NHK Eテレ　「赤十字シンポジウム2012」（14：00～14：59）
※放映日時は変更となる場合がありますのでご了承ください。

AKB48 × 日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

「赤十字を知ってほしい。もっと。」

AKB48メンバーが参加しAED講習会

メルマガ読者と一緒に受講

今後のイベントの予定

名古屋「SKE48と一緒に学ぼう」11月7日開催（応募は締め切りました）

大阪「NMB48と一緒に学ぼう」11月下旬～12月中旬予定

福岡「HKT48と一緒に学ぼう」11月22日

詳しくは日赤×AKB48特設サイトまで

若い世代に絶大な人気を誇るAKB48のメンバーと応募があったメルマガ読者から選ばれた41人が10月24日、東京・新宿にある日赤東京都支部で開かれたAED（自動体外式除細動器）講習会に参加し、一緒に使い方を学びました。

「いざ」というとき、周りにいる人が使えば救命の可能性が高くなるAEDは、全国で普及が進んでいて、現在約38万台が設置されています。日赤ではAEDを用いた心肺蘇生をできるだけ多くの人に体験してもらうために、各都道府県支部などで講習会を常時開いています。

今回、若い世代を中心に心肺蘇生に対する関心をいっそう高めてもらうことを目的に、赤十字オフィシャルメッセンジャーであるAKB48や、姉妹グループのSKE48、NMB48、HKT48のメンバーと一緒に使い方を学ぶ講習会を、東京、名古屋、大阪、福岡の4カ所で順次開催しています。

東京都支部で開かれた講習会には、AKB48メンバーの高橋みなみさんと島崎遥香さんが救護服姿で登場。参加者たちに交じって、AEDの使い方や、心臓マッサージ（胸骨圧迫）の方法などを学びました。

高橋さんらが真剣に学ぶ様子に、参加者の皆さんの本気度もアップ。AKB48の曲「風が吹いている」に合わせて心臓マッサージを行いました。

参加した原田久美さん（24歳）は「AEDを使えるようになりたいと思って参加しました。きちんと講習を受けることが大切ですね」。木次谷翔（きじや）さん（22歳）は「もしも誰かが倒れていたら、今日のことを思い出して助けてあげたい」と決意を語りました。

メンバーの島崎さんは、「（AEDは）最初は難しいかなと思いましたが、実際にやってみたら私でも簡単にできたので、私と同世代のみんなにも、もっと知ってほしい」、高橋さんは「一人でも多くの方が救急法を知っていれば、協力して人のいのちを救うことができます。多くの人に使い方を伝えたいです」と呼びかけました。

講師から「上手ですね」とほめられる高橋さん

メンバーとの記念写真が入った受講証を手にする木次谷さん（右）と原田さん（左）

特設サイトやパンフで講習会参加を呼びかけ

講習会の参加者募集は日赤のメルマガでお知らせしています。メルマガにご登録いただいた方の中から抽選でご参加いただけますので、この機会にぜひご登録ください。（http://www.jrc-akb48.jp/）

AKB48は日赤ホームページの特設サイトで、AED講習会などさまざまな講習会への参加を呼びかけるとともに、パンフレット「AKB48と学ぼう！『心肺蘇生とAED』」にモデルとして登場し、AEDの使い方を紹介しています。パンフレットは日赤ホームページからダウンロードできます。ぜひご覧ください。

高橋みなみさん、島崎遥香さんサイン入り

「AKB48と学ぼう！『心肺蘇生とAED』下敷き」を3名様にプレゼント！

応募方法は7面をご覧ください。

名誉総裁皇后陛下

施設入所者600人に日本手拭いのお見舞い

日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下から10月11日、紙ふうせんがデザインされた日本手拭い600本が日赤に下賜（かし）されました。

ご下賜は、10月20日の皇后陛下誕生日を記念して、毎年行われているもの。日赤はお誕生日に合わせて、下賜された手拭いを赤十字の特別養護老人ホームや介護老人保健施設の入所者らに配付しています。

今年は、4月にオープンした日本赤十字社総合福祉センター・レクロス広尾（東京都）をはじめ、伊勢赤十字老人保健施設（三重県）、特別養護老人ホーム日赤鶯鳴荘（岩手県）、特別養護老人ホーム大寿園（福岡県）、特別養護老人ホーム錦江園（鹿児島県）の5施設600人に配られました。

素敵な贈り物に施設中が笑顔に

レクロス広尾の高齢者グループホームに入居する関口ミツさん（85歳）は、広げた手拭いを握りしめながら「素晴らしい贈り物をありがとうございます。大事にしていきたいと思います」と感動の面持ち。

同じレクロス広尾内の特別養護老人ホームに入所する内村康邦さん（102歳）は「光栄です。せっかくいただきましたから、しっかり使っていきます」と喜びをかみしめました。

手拭いを手ににっこり笑う関口さん。レクロス広尾には特別養護老人ホーム、高齢者グループホームのほか、介護老人保健施設、障害者支援施設が入っています

レクロス広尾の後藤淳郎所長（右）から手拭いを手渡された内村さん。100歳を超えても元気に過ごせる秘訣について聞くと、「幼稚園の頃から、好き嫌いをしないで何でも食べてきたからね」と笑顔で答えてくれました

60年近くに及ぶ手拭いの歴史

日赤への手拭いのご下賜は、昭和天皇の皇后陛下である香淳皇后が昭和24年に始められたもの。配付先や対象者を変えて毎年続けられ、今年で57回目※となります。

昭和24年以前にも皇后陛下からのご下賜は行われており、明治26年から昭和23年までは「双子縞（ふたこじま）」という反物の裏地などが下賜されました。

※途中、手拭いではなく金一封が下賜されていた時期もあります。

今年は紙ふうせんの模様に柄も一新。平成21年から23年までは青い麦穂のデザイン

常任理事会開催報告

平成24年10月9日、本社において平成24年度第6回の常任理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

付議事項

1　予算の補正について（長野県支部の諏訪赤十字病院に対する寄付金の繰出にかかる一般会計歳入歳出予算の補正、諏訪赤十字病院の既借入金の借換にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）

2　資金の借入について（諏訪赤十字病院の既借入金の借換にかかる資金の借入）

3　不動産の処分について（鹿児島赤十字病院の増改築工事にかかる不動産の処分）

審議の結果、予算の補正、資金の借入及び不動産の処分については原案のとおり議決されました。

また、「日本赤十字社辰巳ビル3施設再編計画」にかかる東京都赤十字血液センターの土地取得、赤十字病院グループの施設整備における課題と改革への取り組み及び予算の補正にかかる9月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

血液事業の新体制がスタートしています

血液製剤のさらなる安全、安定供給を目指して

日本赤十字社の血液事業は、今年４月から広域的なブロックを単位とする運営体制に移行。10月には、中四国ブロック血液センター（広島市）が全面稼働しました。広域化により、血液事業はどう変わるのでしょうか？　岡山県赤十字血液センターの池田和眞所長に話を聞きました。

岡山県赤十字血液センター
池田和眞所長

岡山大学医学部卒業後、香川医科大学第一内科、同大学輸血部、岡山大学病院輸血部を経て、2011年より現職。日本血液学会代議員、日本造血細胞移植学会評議員、日本輸血・細胞治療学会中国四国支部長、日本さい帯血バンクネットワーク事業評価委員などを務める。

中四国ブロック血液センター稼働開始
全国7ブロックの広域事業が本格稼働へ

在庫管理一元化で安定供給を実現

Q1 都道府県単位からエリアごとにブロック化することで、何が良くなるのですか？

A1 これまでは各都道府県内で使われる輸血用血液製剤は、都道府県の血液センターがそれぞれ検査・製造を行ってきました。ところが、事業規模の小さい血液センターでは、血液製剤の在庫にばらつきが生じる傾向に。そのため、大量輸血が必要になる臓器移植や交通事故など、特定の血液型の血液製剤が、突発的に大量に必要な場合や、さらに精密に血液型を合わせる必要がある場合には、単独で対応するのが難しく、他のセンターからの協力を仰ぐことが少なくありませんでした。

また、少子高齢化の程度が都道府県により異なることなどにより、都道府県単位では常時、安定した献血者を確保することが難しいという側面もありました。人口の少ない県が集中している中四国では、とりわけそうした問題が顕著だったといえます。

ブロック化により広域的に血液の需要と供給のバランスを調整し、在庫管理も一元化できますので、患者さんが必要とする輸血用血液製剤の安定的な供給が促進されることになります。

血液製剤の品質の均一化を促進

Q2 血液製剤の供給を受ける病院、患者さんにとっても、安心が広がるということでしょうか？

A2 これまでの都道府県単位の体制でも、他県からの緊急輸送で乗り切っていました。ですから、必要な輸血用血液製剤が医療機関に届けられず患者さんに迷惑がかかることはありませんでした。私も以前は臨床の現場にいましたが、県の血液センターに無理を言えば、なんとか対応してくれていたわけです。

しかし、ブロック化によるスケールメリットを活かした供給体制が一層の安心につながることは間違いありません。都道府県単位、特に小さな県では、それぞれが検査や製造に必要な機器を整備・維持し、人員の数や知識・技術のレベルを維持していくのは困難になりつつありました。**ブロックセンターへの検査と製造の集約により、安全性向上への効率的な投資が行えますし、品質の均一化も今まで以上に図れます。**そうした面でも患者さんのメリットは少なくありません。

各都道府県で献血された血液はそれぞれのブロックセンターに集約。一括した製造が行われる

ブロック化でメリットがいっぱいだっち！

献血と供給は従来通り都道府県センターで

Q4 ブロック化により献血場所が遠くなったり、病院への血液製剤配送に時間がかかったりする心配はありませんか？

A4 ブロックセンターへ集約される業務は、大別すると検査・製造です。**「献血者の受け入れ」と、輸血用血液製剤の医療機関への「供給」は、従来通り各都道府県の血液センターが行っていきますので安心してください。**

岡山県でも10月に新しく「献血ルームももたろう」がオープンし、献血者の安全性と快適性を大幅に改善することができました。また、全国的な整備計画の一環として、血液製剤の配送に時間がかかる岡山県北部の医療機関を対象とした供給出張所も開設し、供給面でも整備を進めています。

有効期限が極端に短い「洗浄赤血球」や「合成血液」など一部の二次製剤※については、製造方法の変更による有効期限の延長を実現するなど、製造場所から医療機関までの距離・時間が長くなることに対応した措置がすでに取られています。

また、各都道府県の血液センターには相談窓口となる医薬情報担当者（MR）を配置。中四国では民間の検査機関との連携も強めるなど、医療機関からの問い合わせや相談に対応できる体制も整えています。

※献血血液から製造される一次製剤を原料として製造される血液製剤。副作用を出にくくするなどのために製造されています。

中四国ブロック血液センター

献血ルームも進化するっち！

在庫調整の広域化で廃棄ロスの大幅減

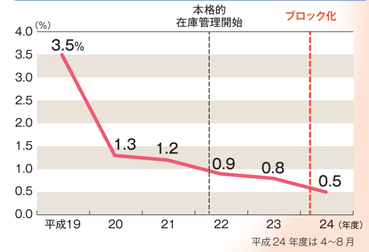
Q3 期限切れで廃棄される血液製剤の量が、ブロック化により減少するなどの効果も明らかになっていると聞いています。

A3 輸血用血液製剤には長期保管が効かないものもあります。白血病やがん治療に使われる血小板製剤の有効期限はわずか４日間です。そのため在庫管理が難しく、期限切れによる廃棄ロスが生じてしまいます。規模が小さい血液センターほどこの廃棄ロスがふくらむ傾向にありました。

ブロック化によるスケールメリットを活かし、徹底した期限管理が可能になります。中四国ブロックではブロックセンターの稼働に先立ち、管内９県一体での有効期限別在庫管理を平成21年から進めてきましたが、その結果、平成19年度に3.5％だった血小板製剤の期限切れ率は、平成24年度（4～8月）に0.5％まで改善されました。

献血者の善意により応えていく体制が、ブロック化で強化されることになったと言えるでしょう。

中四国ブロックにおける血液製剤（血小板製剤）の期限切れ率



平成24年度は4～8月

岡山県に新献血ルーム「ももたろう」一番乗りは47都道府県制覇の西岡さん

岡山駅から徒歩10分の商店街に移転し、10月10日にオープンした「献血ルームももたろう」。広々とした待合室と採血室が献血者からも好評です。

オープン初日、新ルームでの献血一番乗りとなったのは、岡山市在住の西岡正博さん（47歳）。今年８月、全47都道府県での献血を達成していて、今回が通算４９４回目の献血となりました。そんな献血のベテランから見た新ルームのももたろうの印象は「広くて、ゆったりしていて快適。（一階ということで）階段がないのもいいですわ」。

西岡さんが献血を始めたのは18歳の頃。職場の同僚が輸血を受けて、いのちが助かったことを契機に継続的な献血をスタートし、趣味のバイクや旅行で各地を回ったときにも、献血ルームに足を運ぶようになりました。

「健康や食べ物にも気をつけるようになるのが、献血のいいところ。もう、僕の生活の一部ですよ。若い人にもどんどん参加してほしいですね」

献血ルームの開設を祝う地元商店街

オープンの２時間前から並んで一番乗りを果たした西岡さん

血漿分画製剤の安定供給へ歴史的な一歩
一般社団法人日本血液製剤機構 事業開始

日本血液製剤機構のシンボルマークは、英名略称「JBPO」の４文字と献血血液をイメージ

日本赤十字社の血漿分画事業部門と田辺三菱製薬グループの株式会社ベネシスを統合して設立された一般社団法人日本血液製剤機構（JBPO）が10月１日から事業の統合運営をスタートしました。JBPOは、営利を目的としない一般社団法人。安心、安全を最優先に血漿分画製剤の安定供給と国内自給達成を目指していきます。

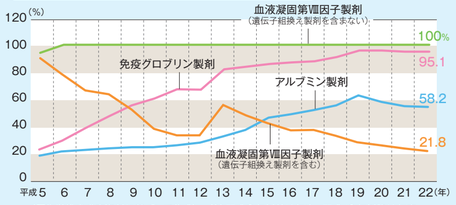
千歳工場の製造処理能力は国内最大規模

日赤が血漿分画事業を民間企業と統合した背景は、血漿分画製剤の国内自給率の低さです。

安全性の確保と安定的な供給という観点から、国策として血液製剤の国内自給が求められています。しかし、輸血用血液製剤が国内献血による自給を達成しているのに対し、血漿を原料とする血漿分画製剤は、生産規模の大きい海外メーカーに太刀打ちできていないのが実情。やけどの治療などに使われるアルブミン製剤の自給率は６割弱に過ぎず、国内製造されていない製剤もあります。

JBPOはこうした現状の改善を目指して発足。国内最大規模となった製造処理能力などスケールメリットを活かした効率的な生産体制により、国内自給実現への一歩を踏み出すことが期待されています。

血漿分画製剤の国内自給率（供給量ベース）の推移



（厚生労働省発表資料に基づいて作成）　注）平成９年以前は年次、平成10年以降は年度

AREA NEWS

防災は家族で一緒に 親子防災教室を開催

山口県
2012.9.2

親子で参加することで真剣度がアップ。久しぶりの「おんぶ」は親子とも楽しいひとときに

防災意識を家族の中から高めていくことを狙った「赤十字親子防災体験教室」が山口県支部主催で開かれ、小学生とその保護者約80人が参加しました。

防災ボランティアが指導に当たった今回の教室のテーマは、「災害から防災を考えよう」。東日本大震災における赤十字の活動を紹介したほか、AEDなどを用いた一次救命処置、非常食の炊き出し体験、救急車や献血バスの乗車見学などを実施。「親子のふれあい」の場となることも意識し、緊急時に子どもを背負って避難する訓練も行われました。

参加者からは「心臓マッサージは疲れたけど、一生懸命やらなければいけないと思った」といった感想のほか、「非常食や水の確保、避難所の確認をする必要がありますね」など教室での体験を日頃の防災に活かしていきたいという声も聞かれました。

World First Aid Day 各地でイベント 消防団と連携した取り組みも

2012.9.8

日赤と消防の指導員が協力しながら行われた市民への講習

9月の第2土曜日は、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）が定めたワールド・ファースト・エイド・デー（世界救急法の日）。日本でも、救急法普及のイベントなどが各支部、施設で行われました。

北海道の北見市にある日本赤十字北海道看護大学において、「World First Aid Day 2012 in KITAMI」と銘打った講習会を、同大学、北見赤十字病院、同市救急法赤十字奉仕団などが共に開催。約100人の参加者が心肺蘇生とAED（自動体外式除細動器）の使用法、三角巾を用いた手当の体験実技に臨みました。

今年で4回目となる北見市でのイベントの特徴は、地域関係機関の「チームワーク」です。北見地域救急医療対策協議会、北見保健所、北見地区消防組合消防本部も参加し、講習会では、消防と日赤の指導員約20人が協力して指導に当たりました。

救急法指導員の畑中悠紀さんは「各機関の連携による講習会は非常に有意義。使用する教材は違っていますが手技は統一されており、何よりも『人間を救いたい』という気持ちは一緒です。日頃の協力が緊急時に人間を救う大きな力となると思います」と語っています。

香川県社会福祉総合センターでのイベントには心肺蘇生実技体験コーナーを設置。学生から年長者まで大勢の参加者でにぎわいました

イオンモール大日で行われた大阪府支部のイベントでは、安全奉仕団によるコントやAEDクイズも行われ、会場を盛り上げました

楽しく競って技術向上 救急法競技会を開催

千葉県／長野県
2012.9～10

山岳事故で負傷した人を救助するとの想定で行われたコンテスト

講習で学んだ救急法の技術を再確認するとともに、広く国民へ普及させていくことを目的とした「赤十字救急法競技大会」が各地で開催されています。

千葉県では、県支部の創立120周年を記念した「赤十字救急法フェスタ2012」が10月18日に千葉市内で開かれました。

同フェスタは、楽しみながら、救命・応急手当の知識と技術を高めていこうというもの。県内各地の地域奉仕団、特殊奉仕団、青少年赤十字加盟校などから約1400人が参加し、5人1組で傷病者の手当をリレーしていく「三角巾リレー」や、事故想定に基づく救命措置を10人1組で行うコンテストにより、救急法の技術を競い合いました。

三角巾リレーで優勝した君津市赤十字奉仕団秋元分団の鈴木由紀子さんは「優勝を目指して頑張ったのでとてもうれしい。普段からのチームワークの力が活かされました」と汗を拭いました。

大人顔負けの一次救命処置を行う小中学生混合チームの大健闘で大会は盛り上がりました

長野県支部主催の「長野赤十字救急法競技大会」が9月15日、佐久市の野沢体育センターで開催されました。46チーム138人が出場し、三角巾リレーと救命手当の2種目で練習の成果を競い合いました。

本大会は県内各地を巡回しながら隔年で開催されており、今年で22回目。

今回は、小中学生混合チームが救命手当競技に出場し、部門別表彰で2位に入賞しました。大健闘したメンバーは「教えてもらった通りにできました。もしけがをした人がいたら今日のように自分たちも人を助けたい」と笑顔で話してくれました。

南海地震想定し院内訓練 警察、消防、自衛隊も参加

大阪府
2012.10.1

リアルな状況を再現した本格的な訓練を実施

南海地震の発生により多数の傷病者が搬送される――こうした想定による災害訓練が、大阪赤十字病院で行われました。訓練当日の10月1日は午後からすべての病院業務を停止。全病院職員に加え、大阪府警や大阪市消防局、自衛隊など約2500人が訓練に参加しました。

実際の災害発生時に近い状況下での訓練とするため、傷病者の人数や状態などは事前に伝えられず、その場での判断を下していくことも今回の訓練の要点。消防、警察が救出した傷病者が続々と病院に搬送される中、トリアージ（治療優先度の振り分け）を実施し、重症患者の緊急手術を行うまでの行程などを確認しました。また、在宅患者や要介護者が病院を訪れる事態も想定。酸素濃縮機などの医療資材をメーカーから臨時に搬入する訓練も併せて行われました。

スポーツとコラボ

輸血で元気になったよ！ あこがれの選手とスタジアムへ

神奈川県 2012.9.15

選手と手をつないだ子どもたちは、大歓声でスタジアムに迎えられました

「献血が、誰かのいのちにつながっていることを実感してほしい」。こうした願いを込め、輸血を受けて元気になった子どもたちがサッカー選手と一緒に入場する「ウィズハンド」のイベントが9月15日、サッカーJ1・川崎フロンターレ対鹿島アントラーズ戦（川崎市・等々力陸上競技場）で行われました。

試合は、「かわさきルフロン献血ルーム」の1周年を記念して、県赤十字血液センターが開催したエキサイトマッチ。ウィズハンドには、白血病や脳腫瘍などを乗り越えて元気になった子どもたち22人とその兄弟の計34人が招待されました。

夢はサッカー選手という男の子は「選手と手をつなげてうれしかった」とにっこり。家族からは「輸血がなくては助からなかったいのち。献血者が増えることを切に願います」などの感想が寄せられました。

鹿児島県奄美地方 台風災害への義援金募集

平成24年8月以降に奄美地方を相次いで襲った台風15号、16号、17号により被災された方々への義援金にご協力をお願いします。

- ●名　称　平成24年鹿児島県奄美地方台風災害義援金
- ●受付期間　平成24年**12月31日(月)まで**
- ●受付口座　鹿児島銀行 鴨池支店 普通口座「**664155**」
- ●口座名義　日本赤十字社鹿児島県支部 支部長 伊藤 祐一郎

※同一金融機関の本支店間の振込手数料（ATMは不可）は無料となります。
※受領証の発行を希望の場合は、その旨を鹿児島県支部にご連絡ください。

日本赤十字社 鹿児島県支部
TEL 099-252-0600

九州大雨災害への義援金 ご協力ありがとうございました

今年7月に大雨災害に見舞われた福岡、大分両県の被災者支援に向けた義援金にご協力いただき、心より感謝申し上げます（8月31日で受付終了）。皆さまから寄せられた義援金額は以下の通りです。両県に設置された義援金配分委員会を通じて、全額を被災者の方にお届けします。

- ・福岡県豪雨災害義援金　**6472**万**9055**円（1704件）
- ・大分県大雨災害義援金　**6609**万**3512**円（3495件）

プレゼント

赤十字150年カレンダー 10名様にプレゼント

「赤十字150年」をテーマにしたポスター作品を公募した第97回二科展デザイン部C部門（特別テーマ）の入賞作品がカレンダーになりました。

傘をモチーフにした厚生労働大臣賞受賞作をはじめ、平和への願い、未来への希望が込められた力作が勢ぞろい。

こちらのカレンダーを抽選で10名様にプレゼントします。

なお、二科地方巡回展も好評開催中です。ぜひ足をお運びください。

巡回展予定	大阪展(大阪市立美術館)	開催中～平成24年11月11日
	京都展(京都市美術館)	平成24年11月29日～12月9日
	広島展(広島県立美術館)	平成25年1月8日～1月13日
	鹿児島展(鹿児島県歴史資料センター黎明館)	平成25年3月6日～3月17日
	福岡展(福岡市美術館)	平成25年4月16日～4月21日

応募方法 ❶赤十字150年カレンダー ❷AKB48下敷き(3面掲載)

①ご希望のプレゼント番号
②お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
③郵便番号・ご住所　④電話番号　⑤年齢
⑥赤十字NEWS 11月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑦赤十字NEWSへのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先●郵　送／〒105-8521　東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室　赤十字NEWS 11月号プレゼント係
FAX／03-3432-5507
メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字NEWS 11月号プレゼント係」）

応募締切●11月26日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

AKB48 × 日本赤十字社

メールマガジンの登録受付中！
日本赤十字社のメールマガジンでは、日赤のさまざまな活動や都道府県支部ごとのイベント案内、お役立ち情報などをお届けします。また、オフィシャルメッセンジャーであるAKB48の特設サイトでは、スペシャルコンテンツを随時更新。ぜひご登録ください。今すぐ http://www.jrc-akb48.jp

facebookに日赤公式ページができました。東日本大震災での取り組みをはじめ、とっさの手当や献血のこと、国内外の活動現場の写真など赤十字ならではの最新情報を発信していますので、ぜひご覧ください！
http://www.facebook.com/japaneseredcross

被災地の子どもを「ゆかりの地」に招待 人道と平和を学ぶ「こころの交流事業」

徳島県 2012.7～9

赤十字ゆかりの地モニュメントの前で人道、平和について学ぶ子どもたち

昨年「赤十字ゆかりの地」に指定された板東俘虜収容所跡地（徳島県鳴門市）に、被災地の子どもたちを招待する「こころの交流プレゼント事業」が夏休み期間を中心に実施され、158人が参加しました。

震災で傷ついたこころを癒やし、新たな未来への活力を養ってもらおうと県支部が主催。第一次大戦で捕虜となったドイツ兵への人道的な対応の歴史などについて学習すると、「戦争をした敵を思いやって助けたのにはびっくりした」などの感想が出されました。

また、徳島県青少年赤十字メンバーとの交流や「阿波おどり」体験にも挑戦。友情と絆を胸に刻んだ被災地の子どもたちからは「震災の時には徳島から助けに来てくれて感謝しています。これからは困っている人がいれば、助けられるような人になりたいです」と力強い決意も聞かれました。

親子で学ぶ認知症 家族、地域の支援隊に！

秋田県 2012.10.6

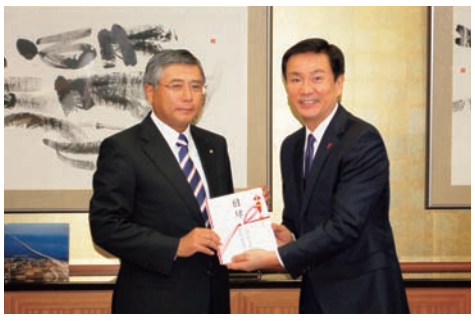
自宅にいるのに「自分の家に帰る」と言う父親に娘はどう対応するのか……寸劇で解説

高齢化率が全国ナンバーワンの秋田県で、認知症の親子講習会が開かれました。これまで開催した認知症の講習会には、60代以上の受講者が大半を占めていましたが、これから介護者となる世代、さらに介護者の支えとなる子どもたちにも広めたい、と小学生親子を対象に企画しました。認知症の父親とその娘が登場する寸劇を交えた講習で、最も関心が高かったのは「否定しない・怒らない・受け入れる」という認知症患者への対応方法。また、認知症が題材の絵本の朗読では、会場が涙に包まれました。

参加者からは「接し方で症状が変わることが分かった」と好評で、今後は生活習慣病のキッズ講座も開催予定です。

「いのちを守り、未来を育む」 献血車両や無線通信車が贈呈

千葉県／和歌山県 2012.9～10


千葉銀行の佐久間頭取（写真左）から千葉県支部長の森田知事（写真右）に目録が贈呈されました

社会貢献活動のコンセプトとして「ひと・環境・産業の未来を育む」を掲げる千葉銀行（本社・千葉市）から、移動採血車（献血バス）の車両相当額として、約4000万円が千葉県支部へ寄付され、10月9日に贈呈式が行われました。

今回の寄付は、来春に創立70周年を迎える同行の記念事業として行われたもの。千葉県庁内で行われた贈呈式では、同行の佐久間英利頭取から県支部長の森田健作知事に目録が贈呈されました。県支部では来年2月下旬をめどに大型の献血バス1台を購入整備する予定です。

JA共済連和歌山の中家会長（写真右）から贈呈を受ける和歌山県支部長の仁坂吉伸知事（写真左）

全国共済農業協同組合連合会和歌山県本部（JA共済連和歌山）から、救急医療活動などに使われる無線指揮車と救急車の2台が和歌山県支部へ贈呈。無線機メーカーのアイコム（本社・大阪市）からは、無線指揮車に搭載する無線機器一式が同県支部へ贈られました。

贈呈された無線指揮車は、災害現場での通信拠点となるもので、普段は血液輸送に使用されます。9月30日に県支部で行われた贈呈式でJA共済連和歌山の中家徹会長は「安全・安心な社会にするため、救命活動に活かしてください」と期待を述べました。

WORLD NEWS

ハイチ　特別リポート

生活改善へ芽生えたコミュニティーの自覚

フォトジャーナリスト 佐藤 文則

2010年1月のハイチ大地震から間もなく３年。被災地は復興に向けてどう歩みを進めているのか。長年にわたりハイチ取材を続けてきたフォトジャーナリスト佐藤文則さんのリポートです。

2012年9月23日、ハイチの国際空港から、日本赤十字社が活動する町レオガンへと向かった。レオガンは首都ポルトープランスから西へ約30キロ。震源地に近いこの町は、壊滅的な被害を受けた。9割の建物が倒壊、2万人以上が亡くなった。

これまでに80カ所以上の給水場の整備、修理を実施した

村を回り、病気の予防や母子保健へのアドバイスをする池田載子看護師長

1年8カ月ぶりのレオガンは、国道沿いの被災者のテント村が消え、倒壊・損壊した建物の多くもすでに撤去されていた。代わりに、壁を青やピンクに塗った真新しい仮設住宅が見えた。

レオガンでは、被災直後から日赤が活動を継続。現在、日本人職員4人が被災者の保健と給水・衛生事業を行っている。

被災後、テント村には支援団体により即座に給水タンクが設置された。その当時、彼らがこれほど簡単に水にアクセスできるのは、これが初めてではないだろうかと思った。それほど一般ハイチ人にとって、水を得ることは大変なことだった。

しかし、テント村を離れれば、以前のように水に難儀する生活。地震によって枯渇した井戸もある。さらに地震から10カ月後、コレラが全土にまん延した。50万人以上が感染し、7000人以上が死亡した。

主役は現地スタッフとボランティア

「私たちの活動は地味な作業ともいえます」。日赤の保健事業マネジャーの池田看護師長はそう語る。職員は、ハイチ人スタッフと一緒に郊外の村々を回り、設置されたトイレや井戸が正しく使われているかを確認。マラリアやコレラの予防、手洗いの講習会などを開く。

だが、職員の姿が目立つことはない。具体的な作業を行うのは、ハイチ人スタッフとボランティア。彼らの傍らに付き添いながら、必要とあれば助言する。サポート役に徹した職員たちの姿が印象的だ。

バス・シャトーという町を訪れたときのことだ。100人以上の住民が、鍬（くわ）とスコップを手に溝川（どぶがわ）の清掃と、道路の中央にできた窪みへの土入れ作業をしていた。水が溜まれば、マラリアとデング熱を運ぶ蚊が発生し、溝から溢れた汚水が井戸水を汚染する危険があるからだ。

長くハイチを取材してきたが、無償でこのような活動をしている大勢のハイチ人を見て、驚かされた。ただ与えられるだけではなく、コミュニティーのために自らが行動する自覚が芽生えてきたのだろうか。

日赤の職員たちの地道な作業が、少しずつながらも人々の間に根付き始めているように思えた。

世界災害報告

世界で7300万人が強制移住 IFRCが「世界災害報告2012」発行

世界では7300万人が強制移住を強いられ、うち2000万人は避難生活が長期間に及んでいる――国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）がこのほど発行した「世界災害報告2012」により明らかになりました。

「世界災害報告」は1993年より毎年発行され、今年で20冊目

強制移住とは、自らの意思に基づかない移住や避難生活のこと。約6割に当たる4300万人は紛争や暴力から逃れた人々で、開発計画による移住者と自然・科学技術災害による移住者が各1500万人ずつとなっています。

強制移住者の多くが仕事を求めて都会に流入する傾向にあり、都市部の人口は2050年までに72%増加を予測。強制移住者の生活環境改善などを各国政府、団体に促しています。

一方、2011年の世界の自然災害発生件数は570件と過去10年で最も少ないものの、東日本大震災の被害により、経済的損失は28兆円と過去10年で最多とリポートしています。

「世界災害報告2012」（英語版）は、IFRCホームページ（http://www.ifrc.org/en）からご覧いただけます。また、「食糧危機」をテーマにした2011年版の日本語訳が完成。こちらは日本赤十字社ホームページ（http://www.jrc.or.jp）からダウンロードできます。

第３回

ドクター中出のカロンゴ日記

中出 雅治（外科医）
1959年生まれ。大阪赤十字病院 国際医療救援部長。専門は呼吸器外科、災害・戦傷外科。インドネシア、パキスタン、ハイチ、イラク、ネパールなどで活動。ウガンダには、計5回、延べ14カ月滞在。

日本赤十字社が2010年4月から取り組む「ウガンダ北部地区病院支援事業」。活動拠点のアンボロソリ医師記念病院（通称カロンゴ病院）での日々を中出医師が報告します。

初めて赴任した当時の小児科病棟。夜間の回診時はうっかり踏みつけないように要注意

入院生活はたくましく

入院生活をめぐるカロンゴ病院と日本の病院との最大の違いは、一言でいうなら「患者さんの扱いがぞんざい」。

病室に殺虫剤を撒（ま）くからとベッドごと庭に放り出されたり、手術を受ける患者さんは、「これ忘れんように」と点滴のビンを手に持たされて手術台まで徒歩で移動させられたり。入院生活にはたくましさが要求されるのです。

このプロジェクトを開始した2年前は、85床の小児科病棟に150人くらいの子どもが入院していました。付き添いの家族を含めれば合計300人以上です。子どもも大人も床にゴロゴロ寝かされていました（最近は地域の保健センターが機能し、患者数も落ち着いています）。

入院生活は家族と一緒に

入院中の食事は病院から提供されず、食事の用意や洗濯は付き添いの家族の仕事です。そのためのかまどや洗濯場も院内に「完備」されていて、付き添う家族も病室で食事や寝泊まりをするので、にぎやかなものです。

ところが、付き添いがいなくなってしまうことが時々起こります。入院中のおばあさんの嘔吐（おうと）がようやく治まったので、食事開始を指示したのですが、付き添いの家族が仕事を探しに出かけてしまい、食事を提供する人がいないなんてこともありましたし、両足骨折で動けないおじいさんの付き添いが失踪（しっそう）してしまったこともあります。

こういう時、同じ病室の周りの患者さんたちが食事を分けてくれたり、何週間も皆で世話を焼いてくれたり。家族や親戚、地域の結びつきの強さ、助け合って生きている共同体の絆を感じます。

看護スタッフもオールラウンダー

こうした入院生活を支えているのが現地の看護スタッフ。途上国にありがちな無断欠勤や、病院備品の勝手な持ち出しなどはなく、そういう意味ではこちらも働きやすい環境です。

外科病棟には28人の看護スタッフがいますが、正規の看護師（助産師）は7人。この人数で84床の入院患者さんをどう看（み）るのか。実は、残り21人の看護助手さんもガーゼ交換などの医療行為を受け持っているのです。看護師の医療行為も日本より広く、麻酔や縫合、創（きず）の洗浄や抜糸も行い、これが日本の4、5年目の外科医より上手だったりします。

そんな看護スタッフの勤務は三交代制。看護師長のパスカは「シフトを組むのが大変なのよ」と、日本の看護師長と同じようなことをぼやきますが、勤務表を見ると同じ人が1週間ずーっと深夜勤だったり、ずーっと準夜勤だったり……。これがここのスタイルなのか、それとも単にパスカが面倒くさいだけなのかは謎のままです。